

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：26301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463425

研究課題名(和文) 医療的ケアを必要とする小児に対する熟練訪問看護師の技

研究課題名(英文) Experienced Visiting Nurses' Practical Knowledge to Manage Children Requiring Medical Care

研究代表者

枝川 千鶴子 (CHIZUKO, EDAGAWA)

愛媛県立医療技術大学・保健科学部・准教授(移行)

研究者番号：00363200

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、医療的ケア児に対する訪問看護師の日常の看護について、日々の経験の中で得られた実践知を明らかにすることである。小児の訪問看護経験が豊かな熟練訪問看護師を対象に、面接調査と同行訪問による調査を実施した。

その結果、病態生理の知識を基に自分の五感を通して、子どもが表現している身体状況を、ケアを通じて得ていた。また、ケアで得られる効果の評価を繰り返しながら身体機能の安定を図っていた。家族が楽しみにしている子どもの反応を大切に見守りながら、必要なケアのタイミングを図るなど、子どもや家族との相互作用の中で、感覚を通して得られた情報をケアに生かし、家族の思いを重視した実践知があった。

研究成果の概要(英文)：To examine visiting nurses' practical knowledge of nursing for children requiring medical care acquired through daily experience, we conducted an interview- and observation-based study, involving those with extensive experience in home pediatric nursing. The experienced visiting nurses assessed children's physical conditions through care, using their own pathophysiological knowledge and senses. They repeatedly evaluated the effects of care to stabilize children's physical functions. They also carefully observed children's responses while considering their families' expectations for improvement, and determined appropriate times to provide necessary care. In short, the experienced visiting nurses' practical knowledge was represented by their approaches provided through interactions with children/families, such as using their own senses to obtain information as a basis for appropriate care, and attaching importance to families' emotions.

研究分野：小児看護学

キーワード：医療的ケア 小児 訪問看護 熟練看護師 実践知 技

1. 研究開始当初の背景

在宅で生活する医療的ケア児の多くは、出生後 NICU に入院し、その後在宅療養へと移行したハイリスクな児が多く、現在増加傾向にある。医療的ケア児と家族が、安心して日々の生活を過ごすためには、訪問看護師による日常の看護が重要であり、子どもは日々成長・発達を遂げているため、体調を整えながら子どもの育ちを促す看護も必要とされる。訪問看護では、子どもだけでなく家族の生活や経済状態、価値観などあらゆるものを考慮した個別性の高い看護が実践されている。子どもや家族との関係の中で実践する看護は、看護師の感覚やイメージ・判断などが含まれ、経験の積み重ねによりコツをつかみ、知恵や工夫が生み出されている。

しかし、その感覚やイメージなどの経験は看護記録などには残されず、実践に埋もれていることが考えられる。小児の訪問看護に熟練した看護師の、日常の訪問看護場面において感覚として身につけた経験知と専門知識を統合して実践している看護の技を言語化し記述することは、小児在宅看護の質向上に重要である。また、その活用によって子どもと家族の QOL 向上が期待される。

2. 研究の目的

熟練訪問看護師が医療的ケア児の訪問看護を行う中で、「感覚的にわかる」「こうすれば良い事が感覚的にわかっている」というこれまで言語化・記録化されなかった状況について面接調査により明らかにする。

また、訪問看護の実践の場面に同席し、看護の実際を看護記録に残されるケア計画・実施したケア内容だけでなく、ケア計画を実践していく詳細な過程とケアを行うタイミングなどを明らかにし、その行為における熟練訪問看護師の視点や判断などを確認し、日々の経験の積み重ねの中で得られたコツや知恵、工夫などの実践知を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン：質的帰納的研究デザイン

(2) データ収集期間：2016 年 6 月～11 月

(3) 対象者

訪問看護ステーションで医療的ケア児の看護実践を行っている看護師のうち、小児の訪問看護経験が豊富で感受性に優れ、かつ自分の行動を振り返り言語化でき、高度な技能を持つと施設責任者が認める熟練訪問看護師として推薦された看護師。

(4) 調査方法

面接調査と同行訪問による調査を実施した。

面接調査では、医療的ケア児の訪問看護において「こうすればうまくいった」「こうすればいいことが感覚的にわかっている」

」「看護介入により状態がよくなった」「こんな経験を通してわかった」など「感覚的にわかる」とした看護実践について、看護師の感覚やイメージ・判断などを顕在化した。同行訪問による調査については、対象看護師の同意が得られ訪問先の協力が得られた場合訪問看護師に同行した。参加観察法によりケア計画を実践していく詳細な過程とケアを行うタイミングなどを観察しデータ収集を行ないながら、その行動にはどんな規則性があるのかなどデータ収集と同時に分析を行い、疑問や気がかり、印象に残った事、他の場面との比較を行ないながら、訪問後、訪問看護師に面接調査を実施し経験を言語化した。

面接内容は許可を得て IC レコーダーに録音した。

(5) 分析方法

面接調査によって得られたデータは、逐語録に起こして内容分析をおこなった。

(6) 倫理的配慮

所属する愛媛県立医療技術大学の倫理委員会に承認を得て調査を実施した(14-017)。訪問看護ステーションに研究協力を依頼し、施設責任者から承諾が得られた後に、熟練訪問看護師の推薦を得た。推薦された熟練訪問看護師に研究目的、方法、途中辞退の自由とそのことによって不利益を被ることはない事、プライバシーや匿名性の保護、データ管理、研究の公表について文書と口頭にて説明し、研究参加の意思を確認し、文書にて同意を得た。また、訪問先の子どもの家族に訪問看護ステーション施設責任者から研究協力について可能か確認をいただいた後に、研究者が直接、訪問先の子どもの家族に文書と口頭で説明し、研究協力の意志を確認し文書にて承諾を得た。

4. 研究成果

(1) 対象者

面接調査の対象となった訪問看護師 9 名。小児看護の経験年数は 16.4 年、小児訪問看護師経験は 10.1 年であった。

同行訪問による調査の対象となった訪問看護師 8 名。小児看護の経験年数は 12.7 年、小児訪問看護師経験は 7.0 年であった。

訪問看護同行による訪問先の協力者となった子どもは 12 名。生後 8 ヶ月～14 歳であった。医療的ケア児(以下、子ども)は、その内 10 名であった。気管切開 6 名、人工呼吸管理 4 名、酸素療法 5 名、吸引 9 名、経管栄養 6 名などであった。

(2) 調査結果

子どもへの日常のケアによる実践知

【病態生理の知識を基にして、自分の五感を通して子どもが表現している身体状況を、ケアを通じて得る】

入浴場で「呼吸音を聞きながら、音って、聴診はしていないんですよ。触診で呼吸確認しながら」「触ったら分かるんですけど、肺雑音が結構触れる」など、呼吸状態を触診で確かめながらケアを調整し、呼吸の安定を図っていた。また、「筋緊張が取れる」「目の動きがあるよなって分かり、すごく、より表情も分かりやすくなってきた」など、全身状態を確認するとともに、子どもの目の動きなど子どもが表現しているわずかな動きや変化を捉えていた。「子どもの非言語的訴えを察知して風呂上りのタイミングを決めている」と、子どもの訴えを察知してケアのタイミングを決めていた。

「（胸に手を何度も当てていたのは、）その左の肩の上がり、いつも緊張がぐっと入ってくると、上がってくるので、ちょっとなじましてあげれるかなと思って」「触ってあげたら、すごい喜んで、ちょっとリラックスして余計な力が抜けて、とかいうところがあるので」と、触れて子どものポジティブな反応を感じ取り、筋緊張を緩和していた。

【ケアで得られる体調改善の状態を繰り返し評価し、ケアを繋いで身体機能の安定を図る】

「お風呂に入って、肺胞も開いたのに、分泌物の音がしなくて、まだ乾燥しているかだったら、もう少し水分足りないかな」と入浴時の呼吸状態や、「1回だけの評価じゃ、しにくいかなっていうのはあるので。1回見ながら、相談しながらかな」と評価を繰り返し、身体機能の安定を行っていた。

【自然に構築された家族との役割分担の中でケアをスムーズに実施する】

「何も言わない間に自然と手順が分担されてやっていた」「自然の流れで実施しているので、普通にAちゃんへの声かけや雑談をしている」と、子どもや家族との会話の中でケアが流れるように実施されていた。

【訪問時に得た情報から子どもの身体状況を推論しケアを決定する】

「土日の状態聞いていて、（家族は）夜もあまり寝ていないと言っていたので、かなり（吸引を）頑張ったかなというのはある」「（子どもが）自分でせきして出したじゃないですか。だから、このレベルだと、自分で出せる」「起きている場合は自分で出せるところまできたら、出すと、それでいいかなあと思って」と、夜間の吸引刺激による粘膜の腫脹を考え、刺激しないで排痰を促すケアを組み立て、吸引しない呼吸管理を行っていた。

【子どもの生理的欲求を判断しケアのタイミングを計る】

経管栄養の場面では、「注入時、胃残があったら、まだお腹がすいていないのかな」「おなかも空いて、空腹というところで食事」と、胃内に残量を認めた場面では、まだ空腹ではないと判断し、子どもの消化時間にあったタイミングを考慮して、栄養の援助を行っていた。

【子どもの状況の見立てと推論を統合し目標設定の基にケアを実施】

「感覚的にですね、この子は食べれるとか、ちょっとこの子難しいんじゃないかっていうのが、何となく感覚ですけど分かるんです。過敏取るのと同時に、多分、その味覚刺激とかをやっている中で、何だろう、唾液処理がうまくいったのかなあ。本当に、はっきり覚えてないんですけど。多分、そうなんかな。唾液処理がうまくいったから、過敏さえ取ってあげたら、ちゃんと吸い付けるし飲めるって思ったのかもしれない。」子どもの感覚統合を見立てに活かし、子どもの機能獲得にむけたケアが経験的判断によって行なわれていたが、日々の関わりの中で子どもをよく観察し、状態を的確に評価した結果のケアであることが明らかとなった。

子どもの状態が変化した時の実践知

【いつでも、すぐ診察を受ける事ができる受診の体制作り】

「病院に連絡し、いつ受診してもすぐ診察を受ける事ができるようファックスなどで情報を入れる」「受診で移動時に必要な酸素などの物品や受診に要する時間を見込んで薬などの準備と、サポート者の手配など家族の受診に向けた準備」「母親の観察などの対応力を経過的に確認」「経過に応じて、薬の時間を調整するなど徐々に日常に戻す」「今回の状況を振り返る」と、今後を予測した早期受診への体制作りや段取りを行っていた。母親と密に連絡を取り合い情報を共有するとともに、母親の見方や気づきに敬意を払い見守り続け、母親の不安の程度を把握し、早期解消に向けた対処が行われていた。また、母親をサポートしながら子どもの経過に沿って判断し、日常に戻すケアを行っていた。

【成長・発達を考慮し睡眠や活動など生活全体を捉えた判断】

「SpO₂や脈拍数など数値だけでなく、生活の様子や本人の表情・活動と発作のバランスなどが重要」「発作後すっかりしているのか、はっきりしない様子なので調子の良し悪しを判断」「成長にともなって心身が変化するタイミングで発作が増えるので、タイミングも考慮する」「活動ができていし、この子が過ごしたいように家族と一緒に過ごせているなら発作があっても上手にコントロールできているのでいい」と、子どもの成長・発達による影響を考慮しながら、普段の子どもの状態と比較し、体温・呼吸・脈拍の変化と経過を重視するとともに、睡眠・覚醒のバランスや機嫌・活動状態などを視点として子どものQOLを判断し、ケアのタイミングを考慮していることが明らかとなった。

子どもと家族の生活を支える実践知

【親子が楽しんでいる瞬間に配慮した生活に溶け込んだケア】

子どものバイタルサイン測定場面では、呼

吸測定・体温測定など一つひとつに間を空けて時間をかけながら実施しており、このとき看護師は足を動かす子どもの動きが止まったタイミングで測定を行っていた。母親は子どもが機嫌よく足を動かす様子を見ることがとても楽しみであり、母親が楽しみにしている子どもの反応に合わせたケアの実施であった。毎日の生活の中での親子の大切な時間を共有しながらケアが生活に溶け込んでいた。

【家族関係に配慮し家族の成長を支えるケア】

「ご自宅で母子分離ができないと、よその場所ではできないだろうということで、まず訪問に入って本人と仲良くなって、そのうち、ちょっと公園とかに連れ出して、家には基本いるんだけどお母さんから離れられるよっていう状況をまず作り出しています。」「お母さんに関して、弟さんのこともやっぱりしないといけないから、弟さんについても、“こんな方法がありますよ”っていう、“こういことをしてる人がいますよ”とか、そういうことを伝える」「お姉ちゃんがやることを否定しないように。やっぱりみんな気を付けるんですよね。触ったら駄目よとかやるんですけど、でも、そういうことじゃなくて、やっていいことと悪いことを、お姉ちゃんに教えていく」医療的ケア児だけでなく、きょうだいも含めた家族全体を看護の対象と捉え、家族の成長を見据えて必要な看護を選択し実施していた。

熟練訪問看護師は継続した関わりの中で、子どもと家族の普段の生活や状態を把握し、子どもと家族を大切に思い、生活に配慮したケアを実施していた。経験や五感を活かして子どもの体調管理を行い、生活や状態に合わせたケアの実践が明らかとなったが、さまざまな場面において実践知が生成されており、さらなる調査の必要性和データの集積による実践知を明らかにすることが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 2件)

Chizuko Edagawa, Yukari Toyota, Mikiko Hori

Experienced home-visiting nurses' clinical judgment and actions in response to a change to the condition of the children who need medical care, The 3rd Conference on Public Health in Asia, April 28-29, 2017 (KKR Hotel in Hiroshima, Japan) 確定

枝川千鶴子、豊田ゆかり

熟練訪問看護師が医療的ケア児に行なう入浴介助に関する経験知、日本看護研究学会中国・四国地方会 第30回学術集会、2017年3月18日~2017年3月19日、岡山コンベンションセンター(岡山市北区)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

枝川 千鶴子 (EDAGAWA Chizuko)
愛媛県立医療技術大学・保健科学部・
准教授
研究者番号：00363200

(2) 研究分担者

豊田 ゆかり (TOYOTA Yukari)
愛媛県立医療技術大学・保健科学部・教授
研究者番号：20217574

堀 美紀子 (HORI Mikiko)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・
准教授
研究者番号：60321254

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし